

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第114号

イザヤ 65:1

平成17年3月25日

さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するように話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。わたしはあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるではありませんか。ある人が、「私はパウロにつく。」と言えば、別の人は、「私はアポロに。」と言う。そういうことでは、あなたがたは、ただの人たちではありませんか。アポロとは何でしょう。パウロとは何でしょう。あなたがたが信仰にはいるために、用いられたしもべであって、主がおのおのに授けられたとおりのことをしたのです。私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。それで、たいせつなのは、植える者でも、水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。植える者と水を注ぐ者は、(目的は)一つですが、それぞれ自分自身の働きにしたがって自分自身の報酬を受けます。私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の賜物です。与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどを建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。もしだれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。 コリント人への第一の手紙3：1-17。

聖書にはキリストが、異なった場所、異なった時に、異なった対象、異なった目的で「永遠の裁きの座」に着かれ、「神の言葉」、真理で裁きを執行されることが記されています。これらをまとめるとキリストによる裁きは一回きりの出来事ではなく、1. 神の裁きの座(あるいは、キリストのさばきの座)、2. 栄光の位、3. 大きな白い御座で行なわれる三通りの異なった出来事として捉えることができるようです。

まず「神の裁きの座」における裁きから考察することにしませう。ペテロは、「さばきが神の家から始まる時が来ているからです。さばきが、まず私たちから始まるのだとしたら、神の福音に従わない人たちの終わりは、どうなることでしょうか。義人がかろうじて救われるのだとしたら、神を敬わない者や罪人たちは、いったいどうなるのでしょうか。ですから、神のみこころにしたがってなお苦しみに会っている人は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せ下さい。」(第一ペテロ4：17-19)と、キリストの名のために迫害にあつて苦しんでいる信者たちを励ましたとき、裁きがまず真の「キリストの証し人」たちの上にと下ると告げ、「神の福音に従わない人たち」に関してはなおさらのことで、究極的に裁きを免れることのできる者はだれもないことを警告しました。ペテロが語ったように、パウロも、この世の終わりに「神の家」、すなわちクリスチャンに対する裁きがあることを語りました。パウロが「神の裁きの座」(ローマ人14：10)、あるいは、「キリストのさばきの座」(第二コリント5：10)と呼んだのは、このクリスチャンに対する永遠の裁きのことでした。

イエスが「さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。」(マタイ7：1-2)と語られたのもクリスチャンに対してであり、信仰告白したクリスチャンであっても裁きの座に立たされることへの警告でした。同様に、キリストの教えにならつてパウロは、ローマの教会に向け、「なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。次のように書かれているからです。「主は言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしの前にひざまずき、すべての舌は、神をほめたたえる。」こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。」(ローマ人14：10-12、下線付加)と、また、コリントの教会に向けても、「主が来られるまでは、何についても、先走つたさばきをしてはいけません。」(第一コリント4：5)と警告したのでした。キリストが裁きをつけてくださる日が必ず来るから、すべてを主の裁量に任せ、そのときまで各自身勝手な基準で裁き合わないよとの警告でした。意外にも聖書は、クリスチャンに対する裁きを確かに語っているようです。

それでは、イエスが「人の子は父の栄光を帯びて、御使いたちとともに、やがて来ようとしているのです。その時には、おのおのその行ないに応じて報いをします。」(マタイ16：27、下線付加)

と言われ、またパウロが「私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。．．．私たちは、主を恐れることを知っているのです、人々を説得しようとするのです。」（第一コリント5：10-11、下線付加）と語ったクリスチャンに対する裁きとはどのような裁きなのでしょう。

クリスチャンに対する永遠の裁きを最も明確に描いているのは、冒頭に引用したコリント人への第一の手紙三章です。この世の掟、価値観、慣わしを追従し、霊的な成熟に達していなかった「肉に属する」コリントの教会のクリスチャンは、アポロかケパ（ペテロ）かパウロか．．．どの指導者につくかで分裂状態にありました。パウロは自身、「私は、他人の土台の上に建てないように、キリストの御名がまだ語られていない所に福音を宣べ伝えることを切に求めたのです。」（ローマ人15：20）と証しているように教会設立の先駆的な働きに従事し、アポロは、設立された教会の会衆の教化に努めた指導者でした。すなわち、「賢い建築家のように、土台を据え（た）」のはパウロで、「その上に家を建ててい（た）」のはアポロです。しかし据えられた土台は不動の「礎石」イエス・キリストですから、その土台の上に建てられるものはすべて主に在って一つなのです。したがって誇るとしたら、どの指導者についているかということではなく、自分がキリストにつながっているか、属しているかということのみなのです。パウロはこのことを、「だれも人間を誇ってはいけません。すべては、あなたがたのものです。．．．あなたがたはキリストのものであり、キリストは神のものです。」（第一コリント3：21-23）と表現していますが、この教えはイエスのような立派な息子を産んだ母親は何と幸せなのだろう！とある女が叫んだとき、イエスがこの世的な人間評価、価値観を一切受け入れられず「いや、幸いなのは、神のことばを聞いてそれを守る人たちです。」（ルカ11：27-28、下線付加）と答えられたのに共通するものがあります。キリストの教えに照らすなら、コリント教会の「ねたみや争い」は、分派を起こして「神の神殿」（キリストの群れ、教会）を破壊する者が神によって滅ぼされかねない危険をもはらんだ、単に未熟という理由だけでは片付けられない深刻な問題だったのです。信仰告白した各自が神に対する自らの姿勢を吟味し、自分がキリストと一体であることを確信することができなければ、キリストの裁きの座に立たされ、自分の言動の申し開きをしなければならぬからです。

「神の協力者」である真の「キリストの証し人」たちとは、「その日」（第一コリント1：8でパウロが語っている、主が再臨される「主イエス・キリストの日」）「それぞれ自分自身の働きにしたがって自分自身の報酬を受ける」べく、今主のために働いている者たちのことです。その各々のクリスチャンの働きは様々です。「金、銀、宝石」に象徴されるのは、「キリストの教えに忠実な働き」のことで、精錬の火（火の裁き）に耐えることができ、真価が認められますが、「木、草、わら」に象徴される「キリストの教えに不忠実な働き」は精錬の火によって消失し、報酬の対象とはなりません。良しと評価されるキリストに在る働きは外部から量ることのできる大きさとか量ではなく、正しい動機、従順、熱意などに裏付けられた質にあるのです。しかしここで大切なことは、劣等な働きのゆえにたとえ評価されるものが何もなくても、各自の信仰がキリストの土台に立っているかぎり、「その人は．．．火の中をくぐるようにして助かり」永遠の命、救いに与ることができるということ、救いは神の計り知れない恩寵であるという点にあります。したがって、クリスチャンの働きの優劣の評価は報酬を決定するために問われるのであって、行く先を決定するものでないことは明白です。言い換えれば、キリストを信じる者たちに対する裁きとは、「いのちの書」からの抹消、滅びを宣言するための裁きではないということです。この永遠の真理を深い洞察で強調しているのが、四福音書のうち最後に書かれたと大方の聖書学者が認めているヨハネの福音書です。使徒ヨハネのメッセージは簡潔です。「御子を信じる者はさばかれぬ。」（ヨハネ3：18）、「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」（ヨハネ5：24）。また、この真理はパウロの表現を用いれば、「キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」（ローマ人8：1）となるのです。すなわち、信仰告白し、罪赦され、キリストの義によって神のみ前に義とみなされ、最後までキリストにつながっているクリスチャンがもし裁かれるとしたら、この世での主に在る働きに対する報酬を決定するための裁きに立たされるということ、このことがパウロが語った『神の御前に自分のことを申し開きすることになる』ということなのです。

二つ目に考察するのは2. 「栄光の位」（マタイ25：31）での裁きですが、その前にイエス・キリストを受け入れた者がすべて真の「キリストの証し人」とみなされるのかどうかという疑問に触れておく必要があります。以上考察してきた1. 「キリストのさばきの座」に立つ者たちは真の「キリストの証し人」ただだからです。イエスは裁きに関するたとえを多く語りましたが、マタイ25章の『タラントのたとえ』とルカ19章の『ミナのたとえ』からこの疑問の答えを得ることができるようです。どちらのたとえもしもべに財産を預け運営を任せ、長旅に出る主人と、預かった財産を管理するしもべが登場し、時を経て戻ってきた主人が彼らの仕事振りを評価し報酬を与えるという設定です。言い換えれば、キリストが父の御許に昇天された後、再臨の日までのキリストの留守の間のクリスチャンのこの地上（この世）での奉仕が、再臨の主によってどのように評価されるかということ、これをこれらのたとえは扱っているのです。マタイのたとえは、任された（したがって期待された）役割りや責任の大小が各自に授けられた能力に応じて違ふことが前提になっています。ルカのたとえは、同等の能力の者たちに同等の役割り、責任が託された場合を扱っています。今回はこの考察から始めることにしましょう。